



# 治と癒

修琴堂大塚医院

渡辺賢治

漢方治療を最大限に發揮するために、治療期間の予測を患者さんと共有する、という話を前号でしました。

今号では治療目標の共有について述べます。

## 「治癒」と「治」と「癒」

以前私の所属する大病院に6年間籍を置いて、漢方の勉強をしたアメリカ・ミネソタ大学の医師がいました。彼が日本で学んだ漢字の中で一番好きだったのが「治癒」です。

「治癒」は1つの言葉として、「治る」「元通りになる」という意味で使われます。しかし、「治」と「癒」では多少ニュアンスが異なります。「治」は、「元通りにする」という意味合いですが、「癒」は「癒す」

で、元に戻るのには難しいけれども、苦痛を取り除き生活の質を上げ、心の安寧を得る、といった意味合いになります。

例えば大怪我をして傷が残って、機能も元通りにならなくても、それ以上の回復が望めない段階で「治癒」と判断します。また、脳梗塞で半身麻痺になっても、リハビリである程度戻れば「治癒」した、と判断します。医療現場は、常に「治す」を目指しますが、病気の前の体と心ですっかり戻ることが難しい場合も多々あり、その場合には「癒す」ことを目標にします。

漢方外来には本来にいろいろな悩みの方が来院されます。残念ながら難しい病気で治すのが難しい場合も多々あります。医師として、歯がゆいことも多々ありますが、「治す」ことができなくても「癒す」ことが

できるように努力しています。

## 「治」を目標とする場合

治療期間は病気になった期間と同じくらいかかる、とよく言われます。そういう意味では感染症は「治す」を目標すべき典型的な病気です。風邪や新型コロナウイルスなど、後遺症なしで治すことが最大の目的になります。

日本漢方がバイブルとします。「傷寒論」は感染症の経過に応じた治療を事細かに記述した本です。疾患としては胃腸の感染症である腸チフスとされていますが、病原菌を直接やっつける抗生物質とは異なり、生体の防御能を駆使して治療する漢方の場合、相手がウイルスであるうが、病原菌であるうが、あまり区別せずに、生体の反応を見ながら漢方薬を選択して治療をします。漢方薬

は慢性病の治療と思われる方も多いと思いますが、もともとが急性病の薬です。風邪の初期の葛根湯、麻黄湯、こじれて咳が出始めた時の小柴胡湯、咳が残った時に麦門冬など、多彩な薬で対応します。

雨の日の頭痛やめまい、などは「水毒」によるものです。「水毒」は体に余計な水分をためこんでしまう病態です。余計な水を排出するに尿か汗（皮膚からの蒸散）になるので、どちらも体を温めて血流をよくすることが重要です。漢方薬では五苓散や当帰芍薬散を使いながら生活を正して、水毒体質から脱却することで治りますが、こちらは感染症と異なり、少し時間がかかります。また、月経痛や月経不順など漢方の「瘀血」から来る病態には桂枝茯苓丸や桃核承気湯を使いま

# 未病漢方事始め

す。瘀血体質が治ればこちらにも治すことが可能です。

もう少し時間がかかるものにアトピー性皮膚炎や気管支喘息などのアレルギー疾患があります。罹患年数にもよりますが、年単位で治療を継続して、最終的に治すことができればその後再発しない、というのが漢方治療の強みです。

## 「癒」を目標とする場合

一方で治すことが難しいのは進行したがんや神経変性疾患と言われるパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症などの疾患です。病気は早期であればあるほど治りやすい、という原則は急性疾患でも慢性疾患でも共通です。漢方治療を最後の砦と考えるひとは、いろいろな治療を受けた後で、最後に漢方を頼ってきますが、この時点ではなかなか難しいことも多いです。例えば大腸がんで、大量の腹水が貯まった状態で来院される方もいらっしゃると思います。腹水で胃が圧迫されて食欲も低下して、血中のアルブミンが低下している状態で、腹水はさらに貯ま



わたなべけんじ  
渡辺賢治

慶應義塾大学医学部卒。慶應義塾大学医学部内科、東海大学医学部免疫学教室に国内留学後、米国スタンフォード大学遺伝学教室に留学。帰国後北里研究所（現北里大学）東洋医学総合研究所、慶應義塾大学医学部漢方医学センター長、慶應義塾大学環境情報学部教授を経て、1931年に開設された漢方専門医院、修琴堂大塚医院院長に就任。横浜薬科大学学長補佐・特別招聘教授、奈良県顧問、神奈川県顧問、漢方産業化推進研究会代表理事、日本臨床漢方医会副理事長、WHO医学科学諮問委員、WHO伝統医学分類委員会共同議長等を兼ねる。1900年以来、西洋医学のみだった国際疾病分類の、第11改訂（2019年）に、伝統医療が初めて取り入れられたが、2005年からプロジェクトの共同議長として長年尽力。主な著書に『漢方医学 同病異治の哲学』（講談社学術文庫）、『未病図鑑』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『漢方で感染症からカラダを守る』（ブックマン社）など。

食欲を回復させて、腹水を軽減して少しでも楽にすることができ、この時点でできることはかなり限定的になってしまいます。

こうした場合、治すのが困難であることを伝えるかどうか、苦慮することがあります。患者さんは最後の砦として漢方治療に望みをかけて来院されるので、漢方治療による「治」にかけています。そんな時はご家族にそつと「治すのは難しい」ことをお伝えし、ご本人には漢方で食欲を改善しますので、なるべくタンパク質を摂取してください、などと日々の生活の具体的なことをお話しします。自分でもまだやるべきことがある、ということは治療の希望にもつ

ながり、大切なことだと考えますので、日々の過ごし方はなるべく具体的にお話するようにしています。初診患者さんに1時間かけることがあるのはこのような理由です。漢方治療の方針を決めるのはそれほど時間がかかりませんが、生活指導（養生）を大事にするからです。

今までも再三書いてきた通り、がんの治療における漢方の役割は、免疫を上げることと副作用を軽減することであり、抗がん治療（手術、化学療法、放射線療法）と併用した時に最大限の効果を発揮します。抗がん剤ができる状態であればStage 4の進行したがんでも長期にわたって小康状態を保っている方もお

られます。

神経変性疾患も非常に予後の厳しい病気です。しかしながら漢方治療と養生で、驚くほど経過の良い場合もあります。進行の度合いはひとりひとり異なるので、たまたま進行の遅い人で、良い経過を辿っているだけかもしれません。

これらの「癒す」ことを目指す病気は、「治す」ことを期待している患者さんを失望させることがあり、漢方治療を続けてくれない場合もしばしばです。時間をかけて、治療目標の共有することで、長く続けてもらうと良い結果をもたらすことができるので、なるべく丁寧な説明をすることを心がけています。